

Winesburg, Ohio

— 語り出される人物たち —

足 田 和 人

序

“I made last year a series of intensive studies of people of my home town, Clyde, Ohio. In the book I called the town Winesburg, Ohio.” (Jones 4) と彼は編集者に手紙を送っている。Sherwood Andersonが、彼の代表作*Winesburg, Ohio*を出版する3年前であった。‘studies of people’ というのは作品中に描かれている23の短編である。しかし、Winesburgという架空の田舎町に住む人々を題材にしている一方、George Willardという青年が、彼らと接することによって成長し、Winesburgを旅立って行くという意味では、一編の長編小説と考えることもできる、一風代わった作品である。

そして、Winesburgという空間と、そこに住むグロテスクな人物達の輪郭をつくっているのは、Anderson独特の「語り」である。この小論では、*Winesburg, Ohio*の「語り」から浮かび上がる当時のアメリカ中西部、そこに存在する人々の心象風景を描き出すAndersonの「語り」の本質を探ってゆきたい。

1

Andersonが生まれ育った当時、アメリカ中西部には確実に産業化の波が押し寄せていた。その一方、古くからある価値観がまだ根強く残っている土地でもあった。そのような背景で、自ら会社を興し、社会の中で成功を収めていったAndersonにとってOhioという土地はまさにシンボルとしての世界の中心であった。もちろんどんな作家にとっても、彼が育った土地は同じような意味をもつであろう。1876年にOhio州Camdenで生まれたAndersonは、1884年に家族とともにClydeに移り住み10年ほどを過ごす。シカゴで広告会社に勤めた後、故郷に帰りペンキ工場の経営を始める。ところが30代も半ばを過ぎた頃に仕事も家族も全てを投げだし失踪するのである¹。Ohioという舞台は自らが産業社会の中で役柄を演じ、崩壊の道をたどるという、Anderson自身が時代の中の登場人物でありえた点において更に重要な意味をもつのである。

この作品に描かれる人物や出来事は、後にAnderson自身が書いているように²必ずしも、彼が住んでいたClydeという町の現実を描いたものではない。*Winesburg, Ohio*を考える時、具体的な土地を想起するよりも、当時のアメリカ中西部に存在していたであろう文化的な不毛と、荒廃する精神が集まった架空の空間として考えるべきである。

作品を通じて、*Winesburg*という町に文化的枠組みはない。共通の規範や経験もなく、集団的な目的も共有してはいない。かといって、確立された伝統も自立した個人も存在しえない。あるものは得体の知れないエネルギーにも似た産業化の波と、それに押し流される空虚な人間精神の塊であった。

In the last fifty years a vast change has taken place in the lives of our people. A revolution has in fact taken place. The coming of industrialism, attended by all the roar and rattle of affairs, the shrill cries of millions of new voices that have come among us from overseas, the going and coming of trains, the growth of cities, the building of the interurban car lines that weave in and out of towns, and past farmhouses, and now in these later days the coming of the automobiles has worked a tremendous change in the lives and in the habits of thought of our people of Mid-America. (34)

その一方、人間を人間として形づくるはずの町は、人を育む所ではなくなってしまった。そのような場所において、空間や関係性も不毛なまま、個人は自己としての方向性を失ってしまう。まさに、文化的廃墟のまっただ中で、バランスを失い、導いてくれる伝統も得られず、漂う魂として日々を過ごすだけの人間達が描かれるのである。

“*The Book of the Grotesque*”と名付けられた序章で、Andersonは一人の老人を使って、非常に入り組んだ語りの枠組みを採用している。老人は長い間作家をしてきた。ある日ベッドの上で自らの生涯を振りかえる場面が、この序章、ひいては*Winesburg, Ohio*全体の始まりとなる。作家は彼の目の前を歩いてゆく、様々な人間の姿に興味をもって見てきた。そして、彼の頭に浮かび、強い印象を残した人間達の行列を“*The Book of the Grotesque*”として一冊の書物を書き上げる。ところが、この書は出版されることはなかった。

It [*The Book of the Grotesque*] was never published, but I saw it once and it made an indelible impression on my mind. The book had one central thought that is very strange and has always remained with me. By remembering it I have been able to understand many people and things that I was never able to understand before. (6)

ここで、着目すべきことは、老作家が書いた‘The Book of the Grotesque’がWinesburg, Ohio全体とオーバーラップしているとする、この物語は出版されず、誰にも読まれることになかったことになるのである。書かれてはいるが、誰の目にも触れない物語として、この物語は始まる。次の一節が、唯一この老作家と外界を結ぶ接点である。読者をこの物語と繋げているのは、ここでは作家の原稿をたった一度見せてもらったという、この語り手の眼なのである。

The subject would become so big in his mind that he himself would be in danger of becoming a grotesque. He didn't, I suppose, for the same reason that he never published the book. It was the young thing inside him that saved the old man. (7)

老人にとって出版されるべきではない書として、また出版されなかったために老人が救われた書という位置づけがされていることは、物語としては非常に逆説的な枠組みなのである。語られるべきでない物語、語りえない物語という体裁が外枠としてWinesburgという町のイメージをつくり、Winesburg, Ohioの閉鎖的な空間を形成しているのである。

この序章に続く、それぞれの物語のあちこちに、ストーリーとは直接関係のない町や自然の描写がされている。黄色いタガラシをびっしり生い茂らせてしまった細長い公道をのぞむ、峡谷のそばのちいさな家 (“Hand”), 霜でひきしまった果樹園 (“Paper Pills”), 橋を渡ると見えてくる、トウモロコシの植えてある空き地 (“Nobody Knows”), のような風景の描写。理想的なホテルの形体の幽霊にすぎないホテル、ウイロード館 (“Mother”), 夕方や暗い日には、軒下の影にゆらゆらと動く鳶色や黒の斑点が浮かぶ、リッチモンド邸宅 (“The Thinker”), 松の木にかこまれ、裏側の錆びたブリキの樋が止め金から外れていて、風が吹くとカタンカタンと一晩中陰気な音をたてる古い家 (“An Awakening”) という町の建物の描写などである。

これらは1つ1つがWinesburgに空気を与え、光そして時には匂いまでもも伴って、読者の意識に土地と風景を作りあげていく。そこから感じられるのは、個々の現象を通り越し、何か根元的なものを捉えようとしている視線である。人間性の本質を描くための地盤とでも言えよう。それは和辻哲郎が根元的風土性の中に、人間性の本質を探っていく姿勢³と類似するものである。和辻が現実にある気候風土から、人間存在の構造を探っていたのとは逆に、AndersonはWinesburgという彼独特の人工的空間を語りによって作り上げることで、人間の真の姿を読者の現前に提示しているのである。

それらの描写は、一幅の絵画の額縁であるかのようにそれぞれのストーリーを独立させている。この作品が一見短編集の体裁をとっているのは、時系列で語られるエピソードの連続

というよりも、語り手やそれぞれの登場人物の感情、思考などを個別の事象として扱っているからある。

そして、AndersonはWinesburgにおいて、現実の生活における時間というよりも、心理的時間、つまり他者や場における関係。対処、行動によって形づくられる心的風景を描くのである。登場人物のいる時間と空間は、歪み、屈折し、合体し、遊離し、一定のイメージにとどまることはない。

Winesburgはアメリカ中西部のある町であるというよりも、存在する場所を失い、精神の断片と化した人間が集まり、浮遊する空間なのである。そのような場での語りの役目は、順序や時間をもとにした、いわゆるストーリーを展開することや、社会のなかで絡み合い成長し発展していく人間達ではなく、亡霊のように行き場を失ってしまった精神、しかしそこに確実に存在し、彼ら自身の存在の証拠をもとめるグロテスクな者たちに一筋の光を当てる作業なのである。

Anderson liked to catch people with their single human secret, their essence, but the more he looks for their essence the more his characters vanish into the vast limbo of meaningless life, the less they are human beings. (Trilling 40-41)

Lionel Trillingが言う‘essence’は*Winesburg, Ohio*を代表する一編、“Loneliness”の中でEnoch Robinsonがアパートの一室に空想の人間達を集め、彼らに語り、求めていた‘essence’に通じるものである。これはまさにAndersonが「語り」出そうとした人間性の本質であり、根源的に孤独な人間達の姿なのである。

2

それぞれの小品に具体的なつながりが見えにくく、断片的ともいえる短編小説が連続している*Winesburg, Ohio*に最小限の統一を与えているのは、George Willardという人物の存在と、彼が成長していく過程である。彼は地元で発行されている*Winesburg Eagle*の青年記者であり、5つの短編を除いてほとんどの作品に登場人物として描かれている。彼はWinesburgに住む1人の住人であり、この町で出会う孤独な人物達と様々な触れ合いをもつ。そのような体験を通して、Winesburgという土地とそこに住む人間の在り方に疑問をもち、“Departure”という最後の物語で列車に乗って町を出るまで、青年から大人へと成長して行くのである。作品全体における彼の特異な存在の意味は、Rex Burbankが言うように、Willardがグロテスクな人物と対位法としての役目を果していることである。

Though he does not appear in all the tales, Willard shares importance in the narrative with the grotesques, to whom he is the symbolic counterpoint. The most profitable approach to the book, therefore, is the examine the nature of the contrasts between Willard and the chief characters of the tales. (66)

Winesburgという土地に根ざしてはいるが、孤独に苛まれ、敗北感にひしがれる人間達がいる。彼らと対照的に、まだ若く、将来に向けて可能性を残しているWillardという青年の存在で、それぞれの物語で描かれる人々の輪郭、彼らを取り巻く空気の質感がよりはっきりとあらわれてくる。

またGeorge Willardは自らがWinesburgに住む登場人物である。“Mother”の中で描かれるように、彼の母Elizabeth Willardは“He [George] is groping about, trying to find himself, Within his there is a secret something that is striving to grow” (18-9)と語り、彼が備えてる可能性を暗示する。父Tom Willardは、息子の就職口に*Winesburg Eagle*を世話する。そしてTomは“I tell you what, George, you’ve got to wake up” (19)と告げる。このような経緯で新聞記者になったGeorge Willardは、発展性のない土地と虚無的な人間達の中で、自己を探し求めていこうとする人物なのである⁴。

「目を覚ます」場所が新聞社であることで、彼はWinesburgという土地と、そこに住む人々を観察する者として、「見る」役目を担うのである。そして、物語を客観的に聞きとる記者の視点に加えて、登場人物が住むWinesburgという同じ平面上に存在し、物語の内部で人間の姿を真横から眺める目線をもっているのである。まさに、人物達の横顔としてのprofileを描くことができる人物と言えるだろう。

この意味において、彼が記者であることは重要な意味をもつ。彼が話を聞き、問いかける人物に対して好奇心をもち、「主観的」な共感を示すことも多い。しかし一方、新聞記者としての客観的な「視線」は、彼を単なる従順な「聞き手」としてしまうのをまぬがれているのである。彼は他の人々が示す価値観に対して、具体的な言葉で最終的に倫理的、道徳的価値判断を下すことはない。取材の対象とでもいえる事象に対して、好奇心をもってはいるが、他の人間の人生にまで踏み込むことはしないのである。

そのような意味でWillardの中立性は、グロテスクな人間達が見せてきた様々な過去や現在の状況に対しても、共感と反感の中立地点にいる。Willard自身1人の人間として、彼らのような人間になってしまう負の可能性と、未来に向けての開いた正の可能性を同時に認識している。彼の中立性は様々な人間の孤独や挫折の歴史を呑み込んでいるWinesburgの過去性と、これから人生を歩んでいこうとする、1人の青年George Willardとしての未来性の狭間に位置

しているのである。

このような立場は、決して否定的、消極的な姿勢ではない。記事を書く人間としては、人々の成功と敗北、愛と憎しみ、希望と挫折など、人間存在に対する共感を学ばなくてはならない。そして、行き場を失ったグロテスクな精神に、光を当ててあげなくてはならないのである。この作業は、新聞記者であるWillardにとって、物書きとしての創造性であり、さらには彼自身の人間としての創造性につながっていくのである。そして、“An Awakening”で、生きることの意味づけの必要性を感じ、彼は次のように独白する。

The law begins with little things and spreads out until it covers everything. In every little thing there must be order, in the place where men work, in their cloths, in their thoughts. I myself into touch with something orderly and big that swings through the night like a star. In my little way I must begin to learn something, to give and swing and work with life, with the law. (101)

Willardにとっての書く作業は、もちろんAndersonの「語る」という作業と二重写しになる。Anderson自身がそうであったように、ビジネスの世界をはじめ、家庭の中でも大切なのは、金銭的将来、社会への責任であった。そして知らず知らずのうちに、町は社会生活に埋もれるうつろな人間で満たされてゆく。

The school teacher in the Ohio town, the farmer in his field, the stenographer in the city, and the 100 per cent American, the “go-getter,” are alike childish and immature. They are ashamed to strive for life and beauty. They are constantly inhibited. They live in a place walled in by conventional business, social relations, economic conditions, and religion, and in many cases never see the light. (Crawford 69)

と、Nelson Antrim Crawfordが指摘するように、人々は人生に対して、美に対して視線をむけることをしていなかった。そして、いつのまにか産業社会という、何ものか、得体の知れない物に、「見られている」だけの人間に変化してしまうのである。見られるだけの人間は、自分の「視線」忘れてしまう。エデンの園のアダムとイブのように、もし自分自身への視線を持ってしまうと、裸の自分、つまり精神的、人間的に無と化している自らの姿が見えてしまうからである。そんな自分を正視できるはずもない。社会のパーツ、家庭内の役割、資本主義の枠組みの中で、消費するための仕事に日々を失ってゆく。‘the light’の見えない場所に、

George Willardという青年を用いて、Andersonはグロテスクな人々に「視線」という光を当てたのである。

Anderson自身、中部アメリカのビジネスマンとして、40年近く、グロテスクに人生を送ってきた。しかし、作家として、人間としての「眼力」を失わなかった。ある日、外部の現象に自分自身をはめ込むことから、突然自分を解放した。そして彼は「見る」存在となる。新しい世界の創造である。それは、社会の仕組み、経済の発展などではなく、同じようにパーツとなり、「見られている」だけの存在を救い出す作業なのだ。自分が何者か分からない視線でなく、同じように、息苦しく呼吸をしながら、「見ている」主体からの視線を投げかける。無機的に、機械的に「見る」産業社会の視線でなく、そんな社会の底面に生き、実体のないものに「見られてきた」1人のアメリカ人の視線で、「見られる」者に命を与える。“The Book of the Grotesque”の中での老作家が言う、幾百もの美しい「真理」を掘り起こすのである。

見られる者であり、同時に見る主体であったAndersonの力学的バランスがくずれ、見る行為に自分自身を見出した。「見られる」だけの存在、つまり、世界（俗世間という意味でも）の中の部品でいることが不可能になった。部品自体がエネルギーをもち、そのエネルギーは、見ることに向かった。見ることは世界をつくることである。世界の仕組みを、見る主体が判断し、新しい空間を構成することである。

語りは世界の輪郭を造り、人々の本当の姿を白日の下にさらし、その本質を暴露する。世界の輪郭とは言っても、決して、アメリカ全土、とか地球規模のスケールである必要はない。Winesburgのように、限られた狭い地域であっても、十分に世界全体を表現でき、奥行きをもった空間になりうる。その為には「語る」主体としての視線が不可欠である。

「視線」は物の姿、人間の姿、心の在り方、関係の結び目、社会の実態をさらけ出すのである。主体の眼は語りによって開かれる。語るということは、「見たい」という欲望である。見ようとする志向性、生命自体がもつ根源的エネルギーなのである。

Andersonの語りは、まさに生きようとする意志と、語ろうとする視線が、主体の中で同一の方向を向いた語りなのである。まるで、赤ん坊が自らの生命を感じて、声にならない声をあげるように、社会生活のなかでうごめく混沌とした人間存在が、真実の生命のありかた、生きるべき個人の人生に形をあたえる作業なのだ。

この作業は、オギュスタン・ベルクが述べている、「イメージの所有と現実の所有ということの間のつながり」(26)の直接性、緊密性につながる。Winesburgという風景に向けた視線は見る者の意志に左右される自発的な行為だ。Andersonにとって、中西部という地域、そして、Clydeという土地を自らの視線の範囲におさめ、語り手の主権を表明する。そして、新たな

Winesburgという空間が生まれたのである。

3

Ohioという土地はAndersonの精神に拭うことのできない印を刻みつけた。もはや彼の視線は、Ohioという空間の内部から逃れることができなかった。

しかし、人間は元来何を語るにしても、自分がもつ信念や体系の内部からしか、物事を語ることはできないし、日常的、科学的な枠組みを前提にせざるをえないのである。つまり、それ以外に語る方法がないのである。その意味において、AndersonはWinesburgという町の枠の内側からしか語れない。そして更に、「自己」という枠組みの中からしか彼の本当の「語り」は表されないことを知っていた。

それぞれ個人は、自分自身が聴衆であり読者となる、彼ら自身の物語の中にのみ存在している。結末もわからず、絶えず改訂し続け、次々と出来事としてのプロットと意味がつけ加えられてゆく。それら全ての場合において、未来への期待や予期さえも、既に歴史的な要素を含み、社会的に束縛されている。そのような外界に対しての反応として「語る」作業は、「自己」を探す行為というよりも、Donald E. Polkinghorneが言うように「自己」を創造していく仕事なのである。

This organic stratum is not a static given; it is a historically established physical dimensions and personal qualities and to organically generated changes in desire. It pays attention to the social and cultural setting in which life events occur and to responses and requests from other persons. Injury and illness, good fortune successes, and accomplishments, and defeats and failures are all made meaningful in relation to the whole plot. (152)

このような意味で、George Willardの成長も、Winesburgという閉じた空間から離れることができず、円環的にまた同じ場所に戻ってくる可能性を秘めている。しかし、たとえそうだととしてもその作業は決して無意味なことの繰り返しではない。

主体の運動は全体から個、個から全体へと回復する。なぜなら、WillardがWinesburgに対して取った態度、そして自己主張としての町からの出発は、自らを取り巻くものへの否定であり、共同性からの分離、つまり人間の個別化だと言える。しかし、一方Winesburgのグロテスクな人々がそうであったように、全体性も始めから、確固として存在していたものではなく、それぞれの個が関連しあうなかで、生成されてきたのである。言い換えれば、Winesburg

で描かれる人間1人1人は全てGeorge Willardでありえたのであるし、George Willard自身もグロテスクな人物の1人であるかも知れないのである。

土地や風土としての全体性は、個人がそこから背き出て成り立つための地盤である。個人はこの地盤からの解放を求めるが、その先には必ず、個別性の否定がある。人間が社会生活を営む限り、個別性は出口を求める。AndersonはWinesburgという町を、否定された個別性が最後に行き着いた場所として描いているのである。

それでは、Winesburgはそこに住む魂の墓場とっていいのであろうか。物語の序章としての“The Book of the Grotesque”と、終章としての“Departure”を検討してみよう。

WillardはWinesburgを出る列車の中で、次のように描かれている。

He stayed that way for a long time and when he aroused himself and again looked out of the car window the town of Winesburg had disappeared and his life there had become but a background on which to paint the dreams of his manhood. (138)

Winesburg という町だけでなく、これから渡り歩くことになろう土地も、出会うだろう人々も、後々には彼の眼に写って通り過ぎた1つ1つの映像になりはてしてしまう。老作家が見ていた“a long procession of figure before his eyes” (6)という表現を見るまでもなく、Willardの未来の姿は、この老作家であるかもしれない。しかし、同時に登場人物としてのGeorge WillardがWinesburgを出ていくということは、Andersonの長編小説*Poor White*の中で、主人公のHugh McVeyのように、行く土地土地で、成長し、成功するための出発点ともなりうるのである。

Andersonの長編小説、*Poor White*の中でHugh McVeyという人物も、ミシシッピ河岸に育ち、14歳で学校教育も受けていない自然児の状態からスタートする⁵。これだけを、見るとMark Twainが描いたHuckleberry Finnを思い浮かべるであろう。ところが、自然の中で、生命のエネルギーを輝かせるHuckと異なり、Hughはミシシッピ河での自然児の要素を産業社会の中で消し続けていくことで、社会的成功を勝ち取っていく。まるで、Huckleberry Finnのネガフィルムのようなものである。しかし、Hughが人生の旅路の中で結論づけたのは、彼が辿った道程を、次の世代の人間達が一人残らず直面しなくてはならないということであった。

He fought to accept himself, to understand himself, to relate himself with the life about him. The poor white, son of the defeated dreamer by the river, who had forced himself in advance of his fellows along the road of mechanical development, was still in advance of his

fellows of the growing Ohio towns. The struggle he was making was the struggle his fellows of another generation would one and all have to make. (*Poor White* 356)

だからといって、これが救いのない結末であるとは言えない。Andersonが人間の未来に対して、投げかけているのは、人生は「開いた」ものであるということなのだ。ありがちな大団円の無いままの、物語は閉じる。一方、様相を変えてゆく社会に、終わりがないように、世代が代わっても、それぞれの世代は前を向いて、その世代世代の空間で生き続ける。Huckの物語にはっきりとした結末がなかったように、Willardの物語も列車が発車する場面で終わる。ただ、河の流れに象徴されるような直線的なイメージとは異なり *Winesburg, Ohio* や、*Poor White* では人間の営みには終わりがなく、一種の円環構造を形づくっているように描かれているのである。Anderson自身にとっても、「語る」作業に終わりがなかった⁶。語りの上にまた新しい語りを上塗りする、らせんのような構造をなしながら語り、人々に対して、自己に対して視線を投げ続けていくことが彼の「語る」作業だったのである。

結 び

Andersonは現実を、土地を、空気を、時間を、空間を見ていた。そしてその中心をなす「自己」の視点から人物を語った。語りは、文字に姿を変え、小説家の前に姿を表す。小説自身が語りに最も近い読者となり、その語りを聞くのである。

人生は、常に改訂され、語り直される物語である。語られることによって始めて、自分という存在が姿を現す。語られない人生は、人生として意味をなさないばかりでなく、その人生そのものが形を失ってしまう。

昨日起こったこと、今日出会った人々、明日の予定、それぞれの事象に、連続した必然性は全くないし、必然的である必要もない。全ての事象は元来、それぞれ *Winesburg* のグロテスクな人間達のように孤立している。しかし、そのすべてが特殊な土地と空間、個々の歴史と時間の中で起こり分断不可能なように、自己という存在も移りゆく現象と切り離すことができない。したがって、自己は語り出されなくてはならないのである。語られることによって現象としての自己から、主体としての自己がとりもどされる。語りは時間と空間を彫刻し、人間の生に、形と意味を与えるのである。

“Anderson had his own share of personal satisfactions in later years and perhaps partially attained that state of inner laughter he wrote about.” (*Introduction*, Modlin xxii) とあるように、晩年の彼は序章に登場する老作家の様子とは異なり、彼の妻と落ちついた生活を送り、静かな日々を日記という形で表し、語り続けてゆくことであった⁷。彼が1人の人間としてた

どり着いた場所は‘Winesburg’ではなかったのである。

Winesburgに沈殿していた数々の魂は、Anderson自身の魂であった。彼の分身とも言えるGeorge Willardという人物の手を借りて、魂たちを浮かび上がらせ、それぞれの魂に形を与えたのもAnderson自身の「語り」であったのだ。

Notes

¹ “I was in a hospital to be examined or mental disorder. They did examine me there. I had left that factory and that town and had wandered about the country for days. I was trying to find some order, some sense, in my own life and in other lives. They picked me up and took me to the hospital.” (“On Being Published” 57) とAnderson自身の記述がある。

² “I myself remember with what a shock I heard people say that one of my own books, *Winesburg, Ohio*, was an exact picture of Ohio village life. The book was written in a crowded tenement district of Chicago. The hint of almost every character was taken from my fellow-lodgers in large rooming house, many of whom never lived in a village.” (“A Note on Realism” 92)

³ 和辻は人間とは、「人」であるの同時に、人々の結合あるいは共同態としての社会であり、人間のこの二重性格が人間の根本的性格であると論じている。(和辻 7-25) 参照。

⁴ “Willard grows from passive observer of life to active participant, from aimlessly curious boy to intensely conscious adult.” (Burbank 69) をはじめ、多くの批評家がWillardの成長に重要な意味を与えている。

⁵ *Poor White* でHugh McVeyの人物像は次のように描かれている。“At fourteen Hugh was as tall as his father and almost without education. He could read a little and could write his own name, had picked up these accomplishments from other boys who came to fish with him in the river, but he had never been to school. For days sometimes he did nothing but lie half asleep in the shade of a bush on the river.” (*Poor White* 4)

また、Irving HoweもMark Twainからの影響は疑いのないところとしている。“there can be no doubt about Mark Twain’s [influence]. Between the America of Anderson’s boyhood, which is the setting of his best work, and the America of Huck Finn there are only a few intervening decades, and the nostalgia for a lost moment of American pastoral which saturates *Huckleberry Finn* is also present in *Winesburg*.” (Howe 94)

⁶ “I’m trying again . . . a man has to begin over and over.” (*Selected letters* 233)

⁷ “She [Anderson’s wife, Eleanor] remains the best one, of all living people I have known.” (Campbell 74) とあるように、晩年の日記の中でたびたび妻への愛情を表現している。

Works Cited

- Anderson, Sherwood. “On Being Published.” *Sherwood Anderson: A Study of the Short Fiction*. ed. Robert Allen Papinchak. New York: Twayne, 1992. 56-57.
- . “A Note on Realism.” *Sherwood Anderson: A Study of the Short Fiction*. 90-93.
- . *Poor White*. New York: New Directions, 1993.
- . *Winesburg, Ohio*. New York: Norton, 1996.
- ベルク, オギュスタン『日本の風景・西欧の景観』篠田勝英訳 東京: 講談社, 1990.
- Burbank, Rex. *Sherwood Anderson*. Boston: Twayne, 1964.
- Campbell, Hillbert H, ed. *The Sherwood Anderson Diaries 1936-1941*. Athens: U of Georgia P, 1987.
- Crawford, Nelson Antrim. “Sherwood Anderson, the Wistfully Faithful.” *Critical Essays on Sherwood Anderson*. ed. David D. Anderson. Boston: G. K. Hall, 1981. 65-73.
- Howe, Irving. *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study*. Stanford UP, 1951.

- Jones, Howard Mumford, and Walter B. Rideout. *The Letter of Sherwood Anderson*. Boston: Little Brown, 1953.
- Modlin, Charles E. Introduction. *Certain Things Last: The Selected Short Stories of Sherwood Anderson*. By Sherwood Anderson. Ed. Modlin. New York: Four Walls, 1922. vii-xxiv.
- , ed. *Sherwood Anderson: Selected Letters*. Knoxville: U of Tennessee P, 1984.
- Papinchak, Robert Allen. "The Short Fiction." *Sherwood Anderson: A Study of the Short Fiction*. 1-51.
- Polkinghorne, Donald E. *Narrative Knowing and the Human Sciences*. Albany: State U of New York P, 1988.
- Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*. New York: Doubleday, 1954.
- 和辻哲郎『風土』和辻哲郎全集 第八卷 東京：岩波書店, 1962.